

向日が丘支援学校の先生方、ありがとうございました

立命館大学 青山 芳文

向日が丘支援学校の先生方、文部科学省研究指定の実践研究、お疲れさまでした。

さて、研究指定を終えた学校は、次のどちらかになることが多いようです。

ひとつは、先生方が疲弊して笑顔が消え日々の実践が停滞していく学校。これは、「立派なものを見せよう」と頑張ってきた学校です。地道な実践家よりも理論家が重用されるようになり、職員室の風通しが悪くなっていきます。

ひとつは、先生方の笑顔が増え日々の実践が豊かになっていく学校。これは、子どもたちとの日常的な関わりを大切にしながら、一步ずつ授業改善を進め、地道な実践を積み重ねてきた学校です。実践的な研究成果によって教育環境の改善が図られ、先生方が自信と喜びを持って子どもたちと関わり、職員室の風通しが良くなっていきます。

向日が丘支援学校の先生方、先生方の学校はどちらでしたか？

この2年間、大和大学の落合先生と共に共同研究者として参加させていただきました。

落合先生は「学校づくり」と「地域との連携（地域の中の学校）」への道筋を示され、助言されたと思います。「地域と共に創る教育内容」が大きく進んだのではないのでしょうか。

私は全学級の授業を参観させていただき、「教室づくり、活動づくり（授業づくり）」について先生方と協議させていただきました。

失礼ながら以前は「子どものすぐそばに密着することが良いことだ」とか「自閉症の指導はこうあるべきだ」といった固定観念での指導が目立っていました。そのため、かえって子どもたちの逸脱行動が誘発されていました。しかし、最近では「わかって動ける授業づくり」が進み、「主体的・対話的」な活動が大きく前進してきたと感じています。

ここで京都府の障害児教育・特別支援教育（知・肢）の歴史を簡単に振り返っておきたいと思います。

1967年に開校した向日が丘支援学校に続き、1970年代に相次いで開校した京都府の養護学校（現特別支援学校）では、教育の場の整備と子ども集団の力に依拠し発達に応じた教育内容の充実が図られていきました。（この時期には、教員が個々の子どもに張り付いて管理・指導することは考えられませんでした。）

子ども集団の力に依拠し発達に応じた教育内容の開発・充実が一段落して、障害や特性に応じた指導の必要性が強調され、教員の定数配置が劇的に改善した1990年代以降は、集団指導・個別指導を問わず「教員が個々の子どもに張り付いて指導する」のが手厚い指導だという風潮（錯覚）が広がっていきました。教員集団の高年齢化もそれに拍車をかけていたように思います。

2010年代に入ると、教員の世代交代が急速に進んできました。若手の教員が多数を占める学校では、ベテラン教員が若手のサポートに回り、学級づくり、授業づくりの中心は若手の教員になり、教務部長や各分掌の責任者の世代交代も進んできました。

今、教員が個々の子どもに張り付いて子どもを動かすのではなく、『子ども自身が分かって動ける』環境づくり・学級づくりを大切に、『子どもの主体的な活動』を引き出す授業づくり（授業改善）が進められています。また、「各教科等を合わせた指導」に代表される生活に根ざした総合的な学習が大切にされてきています。

この2年間、授業づくりの実践研究に関わらせていただいた中で、「さらに充実させ、開発していただきたい」と感じていることを整理します。

- ①指導や支援の前提である「『子ども自身が分かって動ける』環境づくり・学級づくり・授業づくり」をとことん大切にすること

教員が個々の子どもに張り付いて管理・指導する状態に戻らないよう、常に留意すること。

- ②「自分らしく 人とともに」主体的に生きていくための発達の土台の充実のために、特に小学部では「遊びの活動」を大切に、さらに発展させること。

遊びを活用した生活単元学習や教科指導だけではなく、遊びそのものの活動を豊かに支援すること。

[教育課程では「遊びの指導」／教育課程外での遊びの活動の充実も非常に大切]

- ③本物の生活を題材にして活動する生活学習・総合学習を充実させること。

行事のためや進路学習のような「特設生単」だけではなく、日常の生活からの題材や活動内容に広げていくこと。

[教育課程では「生活単元学習」／教科別の指導においてもこの視点は大切]

- ④「人の役に立っていることを実感できる活動」「人から感謝されていることを実感できる活動」の題材や活動内容を開発し、実践していくこと。

中度・重度の障害のある子どもにとっても非常に大切。

[教育課程では「作業学習」など]

- ⑤発達と教科の視点を明確に持った、『わかる』喜びを感じられる学習を開発すること。

[教育課程では「教科別の指導」など]

- ⑥子ども理解や指導内容の設定にあたっては、達成度だけではなく発達の視点を持って、「今持っているどんな力を使って取り組んでいるのか」「どのように分かっているのか」「どのように認識の力が蓄えられていっているのか」を吟味すること。

私は向日が丘支援学校の教育目標「自分らしく、人とともに、今を生きる力を」に強く共感していますが、上記の①～⑥はすべて「自分らしく」「人とともに」「今を生きる」ための授業づくり（教育課程外を含む広義の授業づくり）で、「未来を豊かに生きる力」につながる授業づくりだと考えています。

「開かれた（風通しの良い）教室」＝「外から活動が見える教室」づくり、「風通しの良い職員室」＝「同僚（その学級の担任ではない人）が気兼ねなく意見を言える教師集団」づくりを進め、先生方一人一人が楽しみながら新しい授業を創っていかれることを期待しています。